

菊池寛・芥川龍之介共訳『アリス物語』の謎

木下信一

昭和二年十一月に菊池寛と芥川龍之介の共訳になる『不思議の国のアリス』翻訳『アリス物語』が出版された。これは興文社と文藝春秋による児童文学の叢書「小学生全集」の一冊で、訳者が訳者であることから、古い『アリス』訳を読む人間の間では、今でも人気の高い本だ。昭和二年といえば、芥川が自殺した年である。ここで共訳となっているのは、菊池寛の言葉によると、以下の事情があったからである。

この「アリス物語」と「ピーターパン」とは、芥川龍之介氏の担任のもので、生前多少手をつけてみてくれたものを、僕が後を引き受けて、完成したものです。故人の記念のため、これと「ピーターパン」とは共訳と云ふことにして置きました。

(『アリス物語』注意書き)

*原文は旧字・総ルビ。以降、引用文はすべて新字体、ルビなしで引用する。

ところが、これだけ読むと、芥川がどこまで手をつけていて、菊池があとを引き受けたのか判らない。『アリス物語』と『ピーターパン』とでは、進行状況も違ったであろうが、その辺についても一切言及がない。「共訳と云ふことにして置きました」という言葉を素直に読めば、芥川はほとんど訳していないようにすら見える。果たしてこの『アリス物語』で、二人の訳文の範囲はどこからどこまでであろうか。少しこの謎を探ってみよう。

「小学生全集」と芥川の死

小学生全集は、その発刊時に同時期に発刊されたアルス「日本児童文庫」との間で熾烈な販売合戦が繰り広げられた。この事情について紀田順一郎が『内容見本にみる出版昭和史』(平成四年、本の雑誌社)で概説している(「芸術か、商人か 『日本児童文庫』と『小学生全集』のデスマッチ」前掲書二十二~三十三ページ)。以下、紀田の記述から簡単にその経緯を示す。

「日本児童文庫」はアルス経営者である北原鐵雄が兄・白秋と相談し、企画した雑誌である。鉄雄が白秋に相談した時期を紀田は昭和元年(大正十五年)と推測している。この叢書の最初の広告が新聞に掲載されたのは昭和二年三月七日、東京朝日新聞に五段抜きであった。ところが、その広告のすぐ下に同じく五段抜きで興文社・文藝春秋による「小学生全集」の広告も掲載されていたのだ。

紀田によれば、広告代理店の人間が企画を洩らし、菊池が慌てて類似の叢書の広告を言ったのであろうとのことである。その証拠として紀田が挙げているのは、「日本児童文庫」と同日の広告で菊池が出したのは全集名の広告だけで、細目発表が一ヶ月近く遅れた事実である。その後、双方の相手に対する批判広告や訴訟、宣伝合戦が開始するのだが、ここでは深くは立ち入らない。

芥川が自殺したのは昭和二年七月二十四日である。そして、十一月十八日に菊池・芥川共訳の『アリス物語』が出版された。

さて、紀田の推定が正しいとして、「小学生全集」に『アリス物語』が入ることになったのは、昭和二年三月七日以降、四月以前ということになる。仮に、最も早い昭和二年三月初めに芥川が翻訳を開始したとして、自殺まで四ヶ月半、そして、菊池が引き継いでから『アリス物語』出版までは三ヶ月強ということになる。

果たして、これだけの期間に芥川は、そして菊池は作家や出版人という他の仕事の合間に、『アリス』物語を訳すことが可能であったのだろうか。

下訳は先行訳

ここで、一つ面白い指摘がある。

菊池・芥川の訳文は大正九年の楠山訳を明らかに参照している。例えば一章の The antipathies を「反対人」とし、九章の Uglification を「醜顔術」とする点、テンジクネズミ（モルモット）を四章では「豚鼠^{ギニア・ピッグ}」、一章では「豚鼠^{がたねずみ}」としており、ルビまで同じである。七章、八章の章題も似通っている（七章「気ちがひの茶会」「気違いの茶話会」。八章「女王様の球投場」「女王の球打場」）。

（大西小生『「アリス物語」「黒姫物語」とその周辺』平成十九年、ネガ！スタジオ 六十七ページ）

菊池・芥川訳は先行の楠山訳を参照したというのだ。実際にそうなのか。以下に比較してみよう。楠山訳は『不思議の国』（大正九年、家庭読物刊行会）を比較に用いた。

How doth little crocodile の詩（第二章）：

楠山：

小さな鱷がきらきらと、ノ光る尻尾をうごかして、ノ金の鱗に一つつつ、ノナイルの水をかけます。

歯をむき出して、元気よく、ノ爪をのばして、すばしこく、ノにこにこやさしい歯を見せて、ノ小さな魚を呼び入れる。（二十ページ）

菊池・芥川：

小さい鱷がピカピカと、ノ光る尻尾をうごかして、ノナイルの水をかけます、ノ金の鱗の一枚つつに。

さも嬉しげに歯をむいて、ノきちんと拡げる肢の爪、ノ小さい魚を喜び迎へるノにつこりやさしい顎開けて。（三十五ページ）

Fury said to the mouse の詩（第三章）：

楠山：

やま犬が、うち / で出逢つた、鼠 / にいひました。 / おれたち二人で / 裁判ごつこを / しようなあ。 / おれはお前を / 告発する 。」 / 「よしよしわたしは / 厭だとはいはぬ。 / 裁判ごつこを / してもいい。 / 今朝はわたしも / 用なしだ。」と鼠が / 言ひました。 / 「だが君そんな / 裁判は困るね、 / 陪審官もない / 判事もないでは / 息が切れて / しまうだらう。」 / 「なあにおれは / 判事にもなるし / 陪審官にも / なるのだから。」 / と年をとつて / 狡猾な犬が / 言ひました。 / 「わたしは一人 / で裁判を / 引受けて / お前を / 死刑に / 宣告す / のる (原文ママ) / だ。」(三十八～三十九ページ)

菊池・芥川：

山犬が、お家で / 会つた 鼠に / いひました。 / 「裁判遊びを二人 / でしようぢやないか。 / そしておれはおまへを / 訴へてやる 。」 / 「うん、わたしは / いやとは言はぬ。 / 今朝はわたしは / 仕事がないか / ら裁判遊びを / してもよい。」 / と鼠が言ひました。 / 「ねえ、君 / 陪審員もない / 判事もない / そんな裁判は / 息が切れてしま / ふ「だらうて。」 / 「なにわたしは / 判事にもなつ / たり、陪審官 / にもなつた / りする。」 / と年をとつた / ずるい犬 / は言ひまし / た。「わしが / ひとりで裁判 / をやつて / お前に / 死刑の / 宣告をしてやる。(六十三～六十六ページ)

慎重を期すため大西は控えめに「参照」としているが、ここまで似ていれば、「参照」というレベルではなかろう。もっとも、You are old, Father William の詩にはほとんど共通点はない。詩に関しては、先行訳を利用し、原文を参照しながら自身の訳を作るということもあるかも知れない。現に『鏡の国のアリス』では、旺文社文庫の多田幸蔵訳による *Jabberwocky* が角川文庫の岡田忠軒訳を下敷きにしたとしか思えないほど近似している例もある¹。では、詩ではない、本文の翻訳ではどうか。

Antipathies (第一章)：

楠山：反対人 (対蹠人のまちがひ) といふんだつたわね (五ページ)

菊池・芥川：反対人 (アンテイパシーズ)(アンテイポデイズ 対蹠人とまちがへた) (十三ページ)

This is the driest thing I know. (第三章)：

楠山：わたしの知つてゐる限りではこれが一ばんからからに乾いた面白くない話です(三十ページ)

菊池・芥川：これはわたしの知つて居る限りでは、一番干からびた面白くない話です(五十二ページ)

You see the earth takes twenty-four hours to turn round on its axis....chop off her head !

¹ 岡田訳「ジャバーウォックものがたり」：あぶりの時にトーヴしならか / まはるかの中に環動穿孔、 / すべて衰弱ぼろ鳥のむれ / やからのラースぞ咆嘯したる。

多田訳「ジャバウォッキのうた」：あぶりのときぞ トーブぬらやか / まはるかのなかを ぐわりきりさす、 / すべてほそれな ぼろとりのなれ、 / やからのあぶた ほえずりにけり

Axis axes (第六章):

楠山:「……だつて地球はおのが軸のまはりを自転するのに二十四時間かゝるんでせう。」
「おの(斧)だつて。」と公爵夫人はいいひました。「首をちよん切つておしまひ。」
(八十五ページ)

菊池・芥川:「……御承知のやうに地球はおのが軸の上を廻るのに二十四時間かかるので
すよ。」「おの(斧)だつて。」公爵夫人は言ひました。「首をちよんぎつておし
まひ。」(一二七ページ)

but I know I have to beat time when I learn music. (第七章):

楠山:「……でもあたし音楽のお稽古をする時は時(タイム)をうつ(拍子をとる。)こ
とよ。」(一〇四ページ)

菊池・芥川:「……けれどもわたし音楽を稽古するとき、時をうつ(拍子をとる)ことを
知つて居りますわ。」(一五三ページ)

I dare say there may be one....One, indeed! (第七章):

楠山:「あたしもう口を出さないからね。あたしきつとそんな井戸も一つはあると思ふ
わ。」「一つだと。」と山鼠は怒つていひました。(一一一ページ)

菊池・芥川:「わたしもう口出しなんかしませんわ。一つ位そんな井戸があるかも知れな
いわね。」「一つだつて、」と山鼠は怒つていひました。(一六一～一六二ページ)

等々、普通に訳して偶然似てしまったというには、あまりにも似ている部分が多い。し
かし、訳そのものが正しい場合、偶然似てしまうことはあり得る。問題は、誤訳と思われ
る場面においてすら、二つの訳が似てしまっている点だ。

上記 Fury said to the mouse の詩を例に採ろう。ここで Fury が鼠を連れて行くのは、
(実態はともかく) Fury の意識としてはあくまで「裁判」である。鼠にしても陪審員と
判事がいないと裁判の欠格事由を述べていることから、「裁判」と意識している。現在の訳
でもこの部分は、普通に「裁判」と訳される。先行訳である丸山英観『愛ちゃんの夢物語』
にしても、ここは「訊問」と訳されている。ところが、楠山訳では「裁判ごっこ」として
しまっている。犬と鼠の会話ということで、実際の裁判ではあるまいと判断した上での言
葉であろうが、誤訳とまでいわなくとも、勇み足な解釈であることは明らかだ。また、I'll
take no denial の部分では、Fury が裁判にすると鼠にいい、その鼠の拒否を聞く気がない
という部分であるが、楠山訳ではし「よしわたしは / 厭だとはいはぬ」と、鼠が拒否しな
いことになっている²。そして、この二ヶ所の訳であるが、菊池・芥川ではそれぞれ「裁判
遊び」「うん、わたしは / いやとは言はぬ。」と、全く同じ誤訳をしている。

次に、この後鼠がアリスに「話を聞いてないじゃないか」と責める場面、鼠の“I had not!”
とアリスの“A knot!”の言葉遊びの部分では、楠山は

² その後、昭和七年に出た春陽堂文庫版では、Fury は裁判ごっこではなく裁判をすることになってい
るし、I'll take no denial も、鼠の否認を聞く気がないと訂正されている。

「そんなことはない。」と鼠はとんがつつた、ひどくおこつた声でいひました。

「謎だわね。」とアリスはいひました。いつでも自分をお役に立てさせようとするやうに、心配らしくそこらを見廻しながら、「まあ、わたしに謎解きのお手伝させて頂戴。」
(四十ページ)

と、この knot が not との洒落になっていることに気づかず、「謎」と、なんとか辻褃を合わせようとしている³。一方、菊池・芥川訳では

「さうではない。」と鼠は強く大層怒つてどなりました。

「難問ね。」とアリスはいつも、自分を役に立てさせようと思つて、心配らしく周囲を見ながら言ひました。「まあ、わたしにその難問を、解く手伝ひをさせて下さいな。」
(六十七ページ)

こちらも、knot の誤訳が全く同じ。そして、楠山が「謎」としている部分を菊池・芥川では「難問」としている。

ここまで共通点があれば、断言してもいいだろう。菊池・芥川訳は、楠山訳を下訳として使用していると。

訳文に合うと合わぬがあればとて

次に、菊池・芥川訳の『アリス物語』において、芥川がどこまで訳文を完成させ、菊池がどこから引き継いだのかを確定して行きたい。

作業に当たって、一つの仮説を立てておこう。芥川は翻訳の際に、章単位で訳文を作っているであろうということだ。ただし、訳す際には冒頭から順序よく訳したとまでは仮定しない。自殺した時にはいくつかの訳し終えた章と、場合によっては、途中までしか訳されていなかった章が残されていたであろう。一般的な翻訳の作業を考えても、これは不自然な仮説ではない。ひょっとしたら翻訳メモのようなものもあったかもしれないが、そこまではここでは追わない。

『アリス物語』は全部で二五ページ。原書では冒頭にある詩が省略されているのと、本文中に数ヶ所省略があるのを除けば、ほぼ完訳といって良い。最初にする作業は、本文の中の訳語の不整合を見つけることだ。

英語と日本語とが一対一に対応する言語でない以上、同じ原語であっても、違う訳語に移し替えられることは珍しくない。また、同じような言い回しを、訳者がその時の気分次

³ その後、昭和七年に出た春陽堂文庫版では、この部分を
「曲がりかどまで来たなぞと、そんなことがあるものか。」と、ネズミはとんがつつた、ひどくおこつた声でいひました。
「なぞだつて。」と、アリスはいひました。(四十八ページ)
と、言葉遊びとして処理している。

第で訳してしまい、あとで校正の際に漏れてしまう、ということもある。しかし、本文中に頻出する、あるいはストーリーに密接に絡むキーワードを、前と後で全く違うように訳してしまうということは、一人の訳者の中では考えにくい。前に訳した部分が記憶に残っている筈だからである。では、そういう視点でキーワードを見てみよう。

DRINK ME アリスが飲む瓶についているラベルであるが、第一章では「お飲みなさい」(二十ページ)とあるのに対し、第四章では「お飲み下さい」(七十四ページ)となっている。これについては単純な表記の揺れとも思われるので、注意が必要。

Bottle 第一章では「瓶」、第四章では「壺」となっている。ただし、この部分は楠山訳でも同じ不整合がある。

How doth the little.... アリスが暗唱しようとして、歌詞が全く違ってしまった詩である。第二章では、歌い出しの部分を「小さな鱷が—」(三十四ページ)、実際に暗唱する部分では「小さい鱷が」(三十五ページ)となっているが、第五章で芋虫に話をする場面では原文の”How doth the little busy bee”を「ちいぢやい蜜蜂どうして居る」(九十九ページ)と訳している。ただし、これはHow doth the little busy beeの替え歌がHow doth the little crocodileであるという知識がない場合(そして、これは十分に考えられる)、訳に揺れが出てきてもおかしくない部分。また、訳し終えた後で、章をまたいで訳文をチェックしないと気づきにくい部分といえるかもしれない。参考までに、楠山訳ではそれぞれ「小さな鱷が—」(十九ページ)、「小さな鱷が」(二十ページ)、「小さな蜜蜂は何をしてゐます。」(六十四ページ)となっている。

If everybody minded their own business.... 第六章で公爵夫人が口にし、第九章でアリスに同じ科白で逆ねじを食らわされる。それだけにこの科白もストーリー上のキーワードといえる。第六章の原文は”If everybody minded their own business”.... “the world would go round a deal faster than it does”であり、第九章の原文は、「愛こそが世界を回す」という言葉を受けて)”it’s done by everybody minding their own business”となっている。訳文は、第六章では「誰でも自分の仕事に気をつけてしさをすれば」.....「世界はズツと早く廻っていくだらうよ」(一二七ページ)とあり、第九章では「めいめいが自分の仕事に気をつけてゐれば、何でもできる」(一九二ページ)となっている。第六章の訳文が頭にあれば、第九章でこうも違った訳文、it’s doneの違った解釈は生まれない。ただしこの部分は楠山もそれぞれ「.....だつて地球はおのが軸のまはりを自転するのに二十四時間がゝるんでせう。」(八十五ページ)、「何人も自己の為すべき業を弁ふるに由りて成る。」(一三六ページ)と、不整合を来しているため、取り扱いには慎重さが必要⁴。

Off with one’s head ハートの女王の名科白。第六章で公爵夫人が”chop off her head”という場面では「首をちよんぎつておしまひ」(一二七ページ)とあるのに対し、第八章以

⁴ 戦後の昭和二十七年発行の創元文庫版においても、この部分の不整合は修正されていない。

降（第八、九、十一、十二章）では、第八章でハートの女王が「あの女の子の首を切れ、切つてしまへ」（一七四ページ）第十一章で「外で、今直ぐにあの男の首を切れ」（二二二ページ）とある以外、すべて「打首」となっている。第八章でのハートの女王の科白は、原文が“Off with her head! Off with ”となっており、他に打首の対象になりそうな園丁もいる場面なので、打首の対象が他の誰でもないアリスであることを指すためには、単純に「打首にせよ！ 打 」とはできなかつたのであろうと思われる。しかし、第六章の公爵夫人の科白では、訳文でアリスを指した訳語があるわけではないし、実際、その訳文で十分に意味が通じる。それならばこの部分は単純に「打首にしておしまひ」としても問題はないはずだ。そう考えると、第六章と第八章以降とで、訳文に不整合が生じていると考えて間違いない。ただし第十一章については、ここだけなぜ「あの男を打首にせよ」としなかつたのかは不明である。

Twinkle, twinkle.... 帽子屋がハートの女王の音楽会で歌った歌であるが、第七章では「ひらり、ひらり」（一五五ページ）となっている。帽子屋は第十一章の裁判の場面でも、この歌の冒頭を口にするのだが、そこでは「そしてお茶のちらちらは」（二二七ページ）と訳されている。この場面は、裁判で帽子屋が、始まりはお茶（tea）だったのだといい、その後 twinkle, twinkle といい出す。そこでハートの王が、Twinkle が「T」で始まることくらい解っている、と怒るところだ。Tea と T の洒落を日本語にしようと twinkle を「ちらちら」としたのだろうが、第七章の中の、そして『アリス』の中でも有名な替え歌である以上、第七章を訳した同じ訳者が、第十一章で別の訳語を当てて、しかも過去の章を顧みないということは考えにくい。これは、第十一章を訳した後で第七章を訳したとしても同じことだ。この部分、楠山訳では第七章で「ちいろり、ちいろり、ちいさな蝙蝠。」（一〇六ページ）「そらから茶は、ちらくらちらくら」（一七〇ページ）と、どちらも「ち」で始めている。

次に、訳語ではないが原文での大文字をどう訳文に反映させるか、という点を見てみたい。原書では、大文字で表記している言葉がいくつかある。第一章では、穴を落ちてゆくところでアリスのつけた ORANGE MARMALADE、それとホールにあった瓶のラベル DRINK ME、ケーキに書かれた EAT ME の三つ、第四章で、瓶に DRINK ME と書いていない、となっている部分、そして、第八章で行列の最後に歩いてきたのが THE KING AND THE QUEEN OF HEARTS という部分だ。訳文では、第一章はそれぞれ普通の明朝体で「橙の砂糖漬（十一ページ）」「お飲みなさい」（二十ページ）「お食べなさい」（二十六ページ）となっている。第四章も、普通の書体で「お飲み下さい」（七十四ページ）とある。ところが、第八章のみ、太字・ゴシック体と明朝体混交で「ハートの王様と女王」とある。第八章のみ、原文の大文字を日本語でも強調しているのだ。

ルビの振り方にも面白い不整合が見られる。この本は総ルビであるが、必ずしも訳者が原稿の段階ですべてにルビを振っているわけではなく、実際の作業を植字工に任せていたと考えられる。それゆえ、第一章などでは、アリスが中身を飲む瓶は、原文が bottle であ

り、挿絵でも瓶（ビン）であるにもかかわらず、「瓶」に振られているルビは「かめ」となっていたり「びん」となっていたりと、バラバラである（二十～二十二ページ）。それだけに、特殊なルビを振っているものは、訳者が特別に指定したものと考えて間違いない。⁵

さて、ここまで訳文に見られる不整合について見てきた。そこから、それぞれ不整合のあった章の関係を抜き出すと、

第一章と第四章（ただしこれを不整合といい切るには注意が必要）

第二章と第五章（これも不整合といい切るには注意が必要）

第六章と第九章（これも不整合といい切るには注意が必要）

第六章と第八、九、十二章

第七章と第十一章

第一、四章と第八章

ここで注意が必要としたものについては、一旦偶然の表記の揺れと解釈して無視し、はっきり不整合であると思われるものをまとめてみると、

第一、四、六、七章と第八、九、十一、十二章

と、大きく二つのグループに分けることができる。そしてこれは、本文自体が第七章と第八章で分けられることを示唆しているように思える。

東京弁八標準語ニアラズ

次に、訳語の中で特徴的な言葉遣いを見てみよう。

アリスの科白に注目すると、諸処でアリスが特徴的な言葉遣いをしているのが見受けられる。

『アリス物語』では、アリスの科白に東京訛、あるいはそうであろうと思われる口語が見られる。特にアリスの使う二人称でそれが顕著になる。訳文では「あなた」なども使うが、「お前」もよく使われる。これ自体は昭和初期の本では珍しい話ではない。ところがもう一つ、「お前さん」という表現が、この翻訳のアリスの科白ではよく使われるのだ。それも話の特定の章に偏った形で。他の登場人物がアリスに対し「お前さん」という呼び方をするのは、全編にわたって、それほど違いがあるわけではないのだが、小さい女の子であ

⁵ 例えば第四章で、アリスが白兔の家から逃げてゆくとき、モルモット（guinea pigs）を見かけるのだが、訳語は「豚鼠」となっていて、ルビは「ギニアビツグ」と振られている（八十八ページ）。一方、第十一章の裁判の場面でもモルモットが出てくるのだが、こちらの訳語「豚鼠」には「ぶたねずみ」とルビが振られている（二三〇～二三一ページ）。これについてルビの振り方の指定に不整合があると考えられることもできるが、大西が指摘するように楠山訳も同じルビの振り方であり、それをそのまま引き継いだと考えて良いと思われる。

るアリスが、他の登場人物（アリスが相手を目下と思っているかどうかは判らないが）に対しての使用については大きな偏りが見られる。

最初にアリスから「お前さん」と呼ばれるのは、第二、三章に出てくる鼠だ。鼠に対してアリスは第二章で四回、第三章で二回「お前さん」の表現を使っている。また、第三章では、他の動物たちに対しても一度「お前さん」を使っている。

次に第七章では帽子屋たちに「お前さん(たち)」あるいは「おまへさん」として計八回使用している。この章では帽子屋や三月兔なども、二人称で一番多く使っているのは「お前さん」、次いで「お前」である。

ところが、第八章以降になるととたんにアリスは「お前さん」とは云わなくなる。もちろん、鼠、帽子屋といった連中と女王や王という、話し相手の地位もあるのだろうが、園丁に対しても、「お前」は使っていても「お前さん」はない。後半部分では第九章で一ヶ所、まがひ海亀に対して「お前さん、そんな課目なんか、さう要らなかつたでせう」(二〇二ページ)といているのと、第十二章、裁判の最後で怒ったアリスがいう「誰がお前さんのいふことなんかきくもんか」(二四九ページ)の合計二ヶ所しか使われていない。この頻度の差は意識するべきであろう。

次に、アリスの（通常考えられるような意味では）女の子らしからぬ言葉遣いや江戸・東京訛と思われる表現についても、第七章までは頻出していたのが、第八章以降、急になくなってしまふ。以下、抜き出してみよう。

第一章

「これは確かに前にやなかつたわ」(二十ページ): 楠山訳では「これは先(せん)にはなかつたわ」(九ページ)と、「先(せん)」が東京訛、「にはなかつた」と標準語。

第二章

「お前恥づかしく思はないかい」(三十ページ): 楠山訳では「まあ恥づかしくはなくつて」(十六ページ)と標準語

「すぐと泣くのお止め」(三十ページ): 楠山訳では「お黙り、すぐに」(十六ページ)と標準語

「アア、それは大変な考へ物だ」(三十三ページ): 楠山訳では「まあ、それは大へんな謎だわ」(十九ページ)と標準語

「そしておもちゃなんて、ろくにありやしないのだ」(三十七ページ): 楠山訳では「ろくに遊ぶおもちゃもないのだわ」(二十一ページ)と標準語

「いいえ、わたし決心しちまつた」(三十七ページ): 楠山訳では「いゝえ、あたし考へをきめたわ」(二十一ページ)と標準語

「でも、ああ何て事だ」(三十八ページ): 楠山訳は「でもまあいやだ」(二十一ページ)で、標準語とも東京訛ともとれる

「わたし、こんなに小さくなつたことなんか、決してありやしないわ」(三十九ページ): 楠山訳では「あたしまだこんなに小さくなつたことはないんですもの」(二十三ページ)と標準語

「わたし泳ぎ廻るのに、すつかり疲れちやつたの」(四十二ページ): 楠山訳では「あ
たし泳ぎまはるのがいやになつたの」(二十四ページ)と標準語

「お前さん、デイナーを一目見た日にや」(四十四ページ): この部分、楠山訳では訳
されていない

第五章

「わたしがこの大きさのままで会ひに行つちやあ、悪いかもしれないわ」(一一七ペー
ジ): 楠山訳では「このまゝの体では行けないわ」(七十六ページ)と、標準語

第六章

「あの子は豚になつたよ」(一三九ページ): 楠山訳では「あれは豚の子になつてしま
つたわ」(九十四ページ)と、標準語

第七章

「さうだとも」(一四七ページ): 楠山も「さうだとも」(九十九ページ)と、同じ表現

これ以外にも、第六章では公爵夫人が「わたしはこれから出かけて、女王様との球打ち
遊びの仕度をしなければならぬのだ」(一三〇ページ)と、やや伝法な口のきき方をして
いる。まるで、北村太郎の翻訳を先取りしたかのような言葉遣いだ。楠山ではこの部分、
「わたしやこれから行つて、女王と球投げをするんだからね」とあり、菊池・芥川訳でわ
ざわざ伝法な言葉遣いに修正している。

一方、第八章以降では、たとえば「まあ、もしあつても誰も守りはしないわ」(一八三ペ
ージ)というように、第七章までなら「誰も守りやしないわ」となったであろう部分も、
ごくごく普通の標準語で書かれている。この部分、楠山では「よしあつたにしても、誰も
守りやしないでせう」(一二七～一二八ページ)と東京訛で書かれている部分だが、ちゃん
と標準語に直している。東京訛ともとれる表現を第八章以降から敢えて採るとするなら、
第八章のトランプ「二」の科白「こんなにおれに絵具をはねかすない」(一六八ページ)、
第十二章の「でも、どつちだつてかまやしないわ」(二三九ページ)くらいで、他には全く
見当たらない。そして、この東京訛はどちらも楠山でもそれぞれ「おれの方へ絵具をはね
かすない」(一一五ページ)、「でもどちらでもかまやしないわ」(一八〇ページ)と、同じ
表現なのだ。

つまり、第七章までは、楠山で標準語の言葉遣いに訳されている部分までもが東京訛に
修正され、一方、八章以降では、数少ない東京訛は、楠山の訳文と同じ表現となっている。
むしろ楠山の東京訛の表現を標準語に修正している場所も見受けられる。東京出身の楠山
は、訳語の中に東京訛が混じるのだが、それへの対応が、七章までと八章からで全く違
うのだ。

芥川と菊池の出身地の違いを考えれば、これらの言葉の使用頻度から筆者を推測するこ
とが可能になる。芥川龍之介は東京・入船町で生まれ本所で育った。母方は代々お数寄屋
坊主の家でもある。それに対して菊池寛は香川の出身で、東京高等師範学校へ進むまで、
四国を離れて暮らしたことがない。これらアリスの科白は、江戸っ子の芥川が子供時分に

聞き慣れた、(幾分江戸の名残をとどめた)東京の下町の言葉を使ったのだと考えると理解できる。

もちろん、これだけでは前半部分、第七章までが芥川の筆によると断定はできない。しかし、たった一語、はっきりと筆者を断定できるであろう言葉がある。「あすこ」という言葉だ。これはアリスの科白としては第五章(一一七ページ)と第七章(一六六ページ)に出てくる。また、アリスの科白ではなく鼠の科白ではあるが、第二章でも「あすこ」の表記が出る(四十八ページ)。これらは、楠山訳ではそれぞれ訳語なし(訳出されず「誰が住んであるにしても」と始まる)(七十六ページ)、「あんなところ」(一一三ページ) 訳語なし(「向ふの岸に行きませう。さうしたらわたしの身上ばなしをして上げるから」となっている)(二十八ページ)と訳されているのを、菊池・芥川訳で「あすこ」に直されたものだ。この訳語の選択には訳者の意志が働いたと見ていい。「あすこ」という言葉は「あそこ」の東京訛であり、この表記を使う人間は(意図的に東京訛をまねるのではない限り)東京出身であると考えられる。地方出身の人間が文章を書く際には標準語で書く訓練はしても、わざわざ東京弁では書かないからだ。当然、ここで芥川と菊池では、「あすこ」と「あそこ」の使用傾向が違っていると考えられる。実際にこの二人の「あそこ」「あすこ」の使用頻度について調べてみた。

インターネット上で著作権切れの作家の作品を電子テキスト化している「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)では、芥川が二五三作、菊池の作品が五十作、電子化されている(二〇〇七年五月二日現在。重複を除く)。それらの作品からそれぞれの作家の「あすこ」「あそこ」の使用度数を調べた。これらテキストには新仮名遣いのものと旧仮名遣いのものがあるが、今回の比較には全く影響がない。結果、それぞれの使用頻度は以下ようになった。

作家	芥川龍之介	菊池寛
「あすこ」使用度数	70	5 (3)
「あそこ」使用度数	11	26 (1)

菊池の度数の中で()に入れている数は、『真珠夫人』中「彼処」との文字に振られたルビである。他は芥川・菊池ともにひらがなで書かれた「あすこ」「あそこ」である。ルビについて菊池が意図的に振ったとは考えにくいので、それらを引くと、菊池において「あすこ」と「あそこ」の使用比率は二：二十五となる。また、調査した菊池の作品の中には『小公女』『奇岩城』といった、児童向け翻訳も含まれていたが、これら二作では、菊池は例外なく「あそこ」の表記を使用している。『アリス物語』において、「あすこ」の表記のある第二章、第五章、第七章は芥川の筆によるものと考えて間違いはない。

先に挙げた、章における訳語の不整合、それとここに見るアリスの科白の中の東京訛とを考えるに、『アリス物語』は、第一章から第七章までを芥川が訳し、その死後菊池が第八章から第十二章までを訳したと考えてよいのではないか。想像をたくましくするなら、「は

ねかす」を使用している八章冒頭まで芥川の筆であると考えられるが、現時点ではそこまでの断言は避けたい。

省略は口ほどに物をいい

本文に見られる表現について、第七章を境として違いのあることが見えた。次に、原文そのものの扱いについても、前半部分と後半部分で違いがあることを見てゆきたい。

当時、抄訳や一部を省略した翻訳も出ている中、『アリス物語』はほぼ全訳といって良い。巻頭の詩が略されているのは確かだが、これについては昭和五十年代くらいまでは、略して出されるものも多かったことから、敢えてここに取り上げるまでもない。実際、現行の出版物でも角川文庫の『不思議の国のアリス』などでは、巻頭の詩は全く訳出されていない。本文は、ほぼ原文を忠実に訳しており、前半部分に大きな省略は見られない。

ところが、第九章から、いきなり原文をばっさり切ってしまう部分が出現する。以下に見てみよう。

.....わたしのものが(Mine を鉱山と、「わたしのもの」といふのと一緒にしたのです。) 沢山あればあるほど、あたなのものが益々少なくなる。 といふのだ。」

アリスは考えへてみました。「また考へて居るね。」と公爵夫人は尖った小さい顎で、アリスの肩を突きながら尋ねました。

(一九四～一九五ページ)

ここで、キャロル没直後のマクミラン社版の本で二十六行分、一ページと少しが省略されている。略された部分は、アリスが芥子は植物だがそう見えないといい、公爵夫人がそこからやたら入り組んだ文の教訓を引き出す、という部分。一つのジョークが丸ごと削除されている。

次に、同じ第九章、すぐページをめくった部分で、

.....三十分経つか経たぬうちに、アーチがなくなつてしまひ、球を打つ者も王様と女王様を除いた、他の者は全部拘引されて、死刑の宣告をうけました。

二人歩いていきましたとき、アリスは王様が低い声で一同にむかつて「お前たちはみんな許してやる。」といつて居るのを聞きました。.....

(一九七ページ)

マクミラン版で十行の削除がある。ここでは本来、ハートの女王が「まがひ海亀」の説明をする部分。またページをめくると、

.....「なんてももしろいんだらう。」とグリフォンは半ば独語の様に、半ばアリスに言ひました。「何がおもしろいの。」とアリスが言ひました。

「むかし。」とまがひ海亀がとうとう、溜息をついて言ひました「わたしはほんとの海亀でした。」

(一九八～一九九ページ)

グリフォンがハートの女王の空想について話すところ、アリスが「ここでは誰でも来いと命令するのね」とぼやくところ、「まがひ海亀」に紹介されるところと、一連の場面、二十八行分がばっさり切られている。

少し進むと、

「うん、神秘学があつた。」とまがひ海亀は、課目を鰭で算へながら答へました。

「さうなんだよ。さうなんだよ。」と今度はグリフォンが溜息をついて言ひました。そしてこの二匹の動物は、前足で二人とも顔を隠しました。

(二〇四ページ)

ここで美術の話と古典の話が十五行分カットされている。

そして第十章に、最後の大きな省略部分がある。

……「鱈は いや、いやお前さんは、鱈を見たことがあるだらうねえ。」

「俺たち海老のクワドリール、第二節をやらうか。」

とグリフォンは続けて言ひました。(原文ママ)それともまがひ海亀に歌をうたつてもらうかな」

(二一三ページ)

行数にして一五四行、七ページ分の削除がある。ここでは鱈の話やアリスが今までの話をするいきさつ、「海老の声でする」の詩などがある部分だ。

省略部分を見ると、最初の省略部分こそ前後で多少の整合をとるようにしているが、あとのものは、単純に本文を略しているだけで省略部分の前後での文脈の整合性など全く構っていない。まるで、一ページか二ページという単位で丸ごと訳し落としてしまったかのうようである。

一方、楠山訳にも省略部分はある。省略部分は以下の通り。

第七章

……「その中いろんなものを汲み出しました。 それはもう何でも、頭にMのつくものは何でもくみ出しました。」

「どうしてMの字のつくものをね。」アリスはいひました。

「どうしてMの字ではいけないのだ。」と三月兎はいひました。

こんなに失礼なことをいはれては、もうアリスはがまんができなくなりました。ぷんぷん怒つて、歩き出しました。

(一一三ページ)

第九章

「そこでその格言は 『感を大切にせよ、音は自ら之に従ふ。』といふのだよ(「十銭を大切にせよ、十円は自ら之に従ふ」といふ格言をもぎつたもの。)

「まあこの人はいろんなものに格言をこしらへるころが好きなんだよ。」とアリスは心の中に思ひました。

「また考えてあるね。」公爵夫人は、また尖つたあごをこぢじながらたづねました。

(一三六～一三七ページ)

第九章

「わたしたちは海の中の学校に行きました。先生は年をとつた海亀でした。 さうです、わたしたちは海の中の学校に行きました。あなたはほんとにしらないかもしれないが 。」

「あたしそんなこと言やしないわ」とアリスは遮りました。

(一四三～一四四ページ)

第九章

「わたしはつひに行かなかつたな。」海亀賽きが溜息をついていひました。「あの先生は笑うことと、悲しがることを教へたと、みんないつてゐいたつけ。」

「さうだつたよ。さうだつたよ。」と此度はグリフオンがため息をついて、二人とも前足で顔をかくしました。(ここで章が終わる)

(一四七ページ)

比較すると、七章では楠山訳の省略部分までちゃんと訳している。第九章の公爵夫人の格言の場面では楠山訳の省略部分を一部補填している。海の中の学校の先生についての話は楠山訳の省略部分をきちんと訳しているが、一方、海の中の授業の、美術・古典の授業については楠山以上に省略されている。そして、楠山が省略していない部分についても、大幅に省略されていることが判る。

この、大規模な省略が第九章と第十章にのみあり、前半部分には見られないことは注目するべきである。

言葉遊びの翻訳は

ここまで見てきて、本文の訳は第七章と第八章との間で大きな断絶のあることがはっきりしてきた。そして、前半部分を芥川が書いたであろうことも解った。ところが本文の中で、唯一この分かれ方に従っていない部分がある。それは言葉遊びの翻訳だ。『翻訳の国の「アリス」』(二〇〇一、未知谷)において、楠本君恵氏は、『アリス物語』における言葉遊びの処理の仕方を次のように分類している。

- (一) 日本語の遊びに置き換える
- (二) 英語を片仮名にして用いる
- (三) 日本語で説明を加える
- (四) 無視する
- (五) 論理的に辻褄が合うように解釈する

(九十九～一〇〇ページより、分類の項目のみ)

上記(四)(五)は、訳者が気づかなかったという可能性もあり、積極的に言葉遊びを示したのではないのでここでは考慮しないとして、(一)～(三)の使い分けをみると、訳書中の分布に大きな偏りが認められる。いかにその分布を見てみよう。

章	分類(一)	分類(二)	分類(三)
1	0	2	0
2	1	0	0
3	1	0	2
4	0*	0	0
5	0	0	0
6	1	1	0
7	1	1	1
8	0	1	0
9**	1	1	0
10	0	0	0
11	2	0	0
12	0	1	0

*パットが腕 (arm) を arrum と発音したのを「う、うで」と訳したものについては、ここでは言葉遊びととらなかつた。

**海の底の学校での教科については、言葉遊びを無視したものと解釈した。

第一章では二ヶ所、言葉遊びあるいはそれに近い部分がある。一つは antipodes を antipathies とアリスが取り違える部分だ。

逆立ちして歩いて居る人たちの間へ、ひよつこり出たら随分面白いだらうな。あれは
反対人 (アンテイパシーズ) (アンテイポデイズ 対蹠人とまちがへた)

(十三ページ)

もう一つはアリスが落ちながら考える Do cats eat bats?の部分。

けれど猫 (キヤット) は蝙蝠 (バット) を食べるか知ら

(十五ページ)

どちらも分類(二)の処理がなされている。この二つは洒落や二重の意味を持つ語というわけではなく、特に antipathies については分類(三)の処理は不可能な部分である。

猫と蝙蝠の部分にしても、今でも多くの翻訳では説明抜きで訳される部分であり、敢えて韻を踏んでいることを示すとすれば、分類(二)以外の処理法は考えられない。楠山訳ではそれぞれ「反対人(対蹠人のまちがひ)といふんだつたわね」(五ページ)、「猫は蝙蝠食べるでせうか」(六ページ)と、音については全く触れていない。

第二章では”Curiouser and curiouser!”の部分进行分类(一)の処理で訳している。

「変ちきりん、変ちきりん。」

(二十八ページ)

厳密に言葉遊びといえるか疑問のある部分であるが、分類(二)や(三)の方法で訳すことが不可能なところである。この部分、楠山訳では「おやおや変だわ」(十五ページ)とあり、原文は文法的におかしい英語であることが示されていない。

ところが、同じ言葉遊びでも、明確に洒落の部分の処理となると違ってくる。第三章では、三つ出てくる言葉遊びの訳のうち二つが(三)の分類に入り、一つが(一)の分類に入る。(一)に入るのは鼠の”This is the driest thing I know.”の部分で、訳は次のようになっている。

これはわたしの知つて居る限りでは、一番干からびた面白くない話です。

(五十二ページ)

これは楠山の訳語「わたしの知つてゐる限りではこれが一ばんからからに乾いた面白くない話です」(三〇ページ)を、そのまま踏襲している。訳者自身は洒落とまでは考えなくとも、原文のdryの二義性を積極的に訳出した楠山訳をそのまま採用したと受け止めることができる。

分類(三)とされるものの一つが”and even Stigand, the patriotic archbishop of Canterbury, found it advisable ”から始まる”it”を巡る言葉遊びだが、訳文では、形式目的語のitについてではなく、foundの多義性による言葉遊びと解釈して、こう訳している。

「……愛国者であるカンタベリーの大僧正、スタイガンド(Stigand)ですらも、それを適当なことと知りました。」

「何を見つけたつて？」と鴨が言ひました(英語で今の「知りました。」といふ言葉は、普通「見つけた。」といふ意味に、使はれるものだからです。)

(五十三ページ)

この部分は、楠山訳では

「……愛国者なるカンターベリの大僧正スタイガントすら、それを正当と認めたのであります。」

「何を認めたと。」と鴨がいひました。

(中略)

「わたしは自分で何か見つけたときだけ、『それ』が何の意味だか分かるよ。……」

(三十一～三十二ページ)

と、found it の多義性について無視している。

もう一つは”Mine is a long and a sad tale!”に始まる、tale と tail の取り違えの部分。訳文はこうなっている。

「わたしのお話は長い、そして悲しいものなんです。」と鼠はアリスの方を向いて、溜息をつきながら言ひました。

「全く長い尾(しつぽ)だわ。」とアリスは、不審さうに、鼠の尻尾を見て言ひました。

「けれどもそれが何故悲しいといふんですか。」(英語で「おはなし」といふ言葉は、「尻尾」といふ言葉と音が同じに聞えるのです。)

(六十二～六十三ページ)

この後の”not”と”knot”の取り違えについては訳されていない。

楠山訳では

「私の話は長くて悲しいお話ですよ。」と鼠はアリスの方を向いていつて、溜息をつきました。

「全く長い尾はなしだわ。」とアリスは物めづらしさうに鼠の尻尾をながめて、「けれどもなぜ悲しいつていふでせうね。」

(三十七ページ)

と、現在の「尾話」に通じる言葉遊びになっている。ここで楠山訳をそのまま採用しなかった理由は判らない。ただ、楠山訳が傍点を振っているとはいえ、一見、これが日本語の洒落になっていることが解りにくいのも確かであり、楠山の工夫を訳者が見逃した可能性はあると思われる⁶。

後の章も含め、本文中、分類(三)のものは、第七章に一ヶ所(後述)あるのを除けば

⁶ これと同じように楠山訳の日本語の洒落を敢えて分類(二)の方法に修正している部分が、第十二章にもある。Fitの洒落の部分で、楠山訳では「ではほづきなんといふ言葉はあなたにはふづきはしくない言葉だね」(一八九ページ)とある部分が、菊池・芥川訳では「それぢやフィット(発作)なんかいふ言葉は、お前にはフィットしない(当てはまらないしねえ。)(原文ママ)(二四八ページ)とされている。この部分も、一見、日本語の洒落とは解りにくい部分である。

この二つだけである。訳されていないものを除けば、他の部分は、おおむね分類（一）か（二）の方法で処理されているのだ。つまり、言葉遊びの処理については、三章を境に変わっていることになる。

これは、先の特徴と大きく矛盾するように見える。一体、これをどう解釈するべきか。ヒントは第六章に隠されているように思われる。

第三章以降で、最初に言葉遊びを明示的に訳しているのは第六章、アリスと公爵夫人との会話である。各人がそれぞれ自分のことを考えていれば世の中はもっと早く回るであろうとの公爵夫人の言葉にアリスが” You see the earth takes twenty-four hours to turn round on its axis ”と返し、公爵夫人が axis を axes ととって「首を切れ」という部分だ。

「……御承知のやうに地球は^{れい}おのが軸の上を廻るのに二十四時間かかるのですよ。」

「おの（斧）だつて。」公爵夫人は言ひました。「首をちよんぎつておしまひ。」

（一二七ページ）

鼠の dry を、訳者がことさら言葉遊びと意識して訳していないとするなら、ここで分類（一）が初登場する。この言葉遊びの処理については、楠山の訳をそのまま採用している。次に言葉遊びが出てくるのは「チエシヤー猫」とアリスの会話。

「お前はピツグ（豚）といつたのかい、フイツグ（無花果）といつたのかい。」と猫が言ひました。

（一四一～一四二ページ）

と、分類（二）の方法で処理されている。この部分、楠山は

「お前さん豚といつたのかい、葡萄といつたのかい。」と猫はいひました。

（九十五ページ）

という風に「豚」「葡萄」の頭韻で処理している、分類（一）の方法だ。だが、これはよく読めば頭韻だと解るものの、普通だと日本語の言葉遊びだと気づかない。訳者は、この部分を楠山の明らかな誤訳であると考え、fig の正しい訳語である「無花果」を訳出した上で分類（二）の方法を採ったのではないだろうか。

そしてこれ以降、分類（二）の方法を中心に、時として分類（一）の処理が混じる。分類（三）といえそうなのは第七章で beat time の訳語を

「……けれどもわたし音楽を稽古するとき、時をうつ（拍子をとる）ことを知つて居

りますわ。」

(一五三ページ)

としている部分一ヶ所のみである。この部分は楠山の

「……でもあたし音楽のお稽古をする時は時(タイム)をうつ(拍子をとる。)ことよ。」

(一〇四ページ)

を、そのまま踏襲している。ただし、この部分も分類(三)以外の方法で日本語にすることは難しい。現代ですら分類(一)で訳す例がほとんどなく(「時間を打って、拍子を取る」というような訳が多い)洒落ではなく、逐語的な解釈と慣用句としての解釈を認める二義性を持った言葉であるため、分類(二)のように処理して済ませるといってもゆかない部分であるからだ。

そうすると、ここで訳者たちの処理の方針がおぼろげながら見えてくるのではないか。当初、おそらく芥川であろう訳者は、原文の言葉遊びの部分を、楠山を底本にしつつ、単に日本語で説明だけして済ませる積もりで訳を進めていた。ところが第六章で楠山が英語の洒落を日本語に置き換えた部分があった。それも dry のように二義性を持った単純な単語ではなく、全く別の単語に取り違えるという、洒落の部分で。以降はメモ的に、訳稿の中に英語の読み、あるいはスペルと日本語の意味とを書いて訳を進めて行ったのであろう。後でその部分を日本語の言葉遊びにする積もりで。ところが全文訳が完成しないうちに芥川は自殺してしまった。後を受けた菊池は、芥川がやったと同じく楠山を底本として日本語の言葉遊びに直せるところはそうして、そうでないところは英語の読みと日本語を併記していった。そして、すべての言葉遊びを見直して日本語化するという作業を行わずに、いくつかの処理が混在したまま『アリス物語』を出版した。

おそらくこういうところだったのではないだろうか。

菊池寛の『アリス物語』注意書きの謎と二つの共訳の発行日

さて、芥川が第七章まで訳していたとすると、菊池の書いた注意書きに奇妙な点が出てくる。先にも挙げたが、菊池はこう書いているのだ。

この「アリス物語」と「ピーターパン」とは、芥川龍之介氏の担任のもので、生前多少手をつけてみてくれたものを、僕が後を引き受けて、完成したものです。故人の記念のため、これと「ピーターパン」とは共訳と云ふことにして置きました。

(注意書き)

芥川が生前多少手を着けていたものを、菊池が後を引き受けた、芥川の記念のため、共訳ということにしておく、これでは菊池がほとんどの部分を訳したととられても仕方のな

い書き方ではないか。芥川が『アリス物語』の過半を訳していたとすると、この注意書きは、菊池が自分の名誉欲で書いたと考えても酷すぎることになる。親友でもあった芥川に対し、菊池がそのようなことをするであろうか？

おそらくこの注意書きを、我々は間違っただけで解釈していたのではなかろうか。菊池がこの注意書きで思い描いているのは『アリス物語』と『ピーターパン』の二つであり、共訳についての説明もこの二つのことを指しているのだ。そして芥川の残した訳稿は、『アリス物語』と『ピーターパン』では、進行状況に大きな違いがあったのではないか。

実際、芥川が自殺したのが七月二十四日、『アリス物語』の発行日が十一月十八日と、その間は四ヶ月に満たない。いくら底本があったとはいえ、アルスとの販売合戦で多忙な菊池が大部分を訳して発行するという事は不可能に近い。芥川が過半を訳し（ひょっとしたら後の章も下書き程度のものはあったのかもしれない）後を受けた菊池が訳を脱稿、出版に漕ぎ着けたのがなんとか十一月の配本だったと考えるほうが自然である。

そしてこれは、続く『ピーターパン』の発行日からも推測される。

『ピーターパン』の発行日は昭和四年四月一日、『アリス物語』に後れること一年半である。分量にして『アリス物語』の倍はあろうかという『ピーターパン』であるが、この一年半の差を、単純に全体量だけに求めるのも無理があろう。芥川が残した二つの訳稿に、大きな進行の差があったのだらう。

「共訳と云ふことにして置きました」という菊池の言葉には、もう一つの解釈も考えられる。楠本君恵氏の解釈であるが、通常の共訳では訳者同士が相談し、議論しながら訳稿を完成させるのに対し、『アリス物語』『ピーターパン』の事例では、それが行われていない。芥川の後を引き継いで菊池が訳を完成させているのであり、普通にいわれる「共訳」には当てはまらない。それを考えて菊池は「と云ふことにして」おくと書いたのではないかというのである。非常に説得力のある解釈だ。加えてこの解釈は上記解釈と矛盾なく両立するものである。

これらの解釈を踏まえて菊池の注意書きを見ると、『アリス物語』の出版事情も見えてくる。七月末に芥川が急に自殺したというのは、菊池にとっては大きな衝撃だった。特に小学生全集は、北原鐵雄がアルス社で企画した日本児童文庫の企画を盗んだ、盗まないで裁判沙汰にもなり、小学生全集の共同編集者でもあり、白秋、菊池ともに親しい芥川が自殺したときには二人の板挟みになったためだとの噂も立った（紀田、前掲書）。菊池にしてみれば、親友芥川の本を早く出したかったであろう。もちろん、そこにはジャーナリストとしての、文藝春秋創設者としての菊池の商才もあったに違いない。芥川の死がニュースになる間に、小学生全集から訳を出す。そのためには分量が少なく、しかも芥川が過半を仕上げている『アリス物語』を早急に出してしまうに如くはない。途中、時間のかかりそうな部分は省いてしまって訳す。芥川の問題性を持たせるためにも注意書きは書いた方がいい。『ピーターパン』は、訳すにしても時間がかかるだろう、だからこれについても宣伝の意味を込めて『アリス物語』の注意書きに書いてしまおう……。おそらくはこういうことだったのではないか。事実、芥川が死んで二年近く経って出た『ピーターパン』には、菊

池の注意書きはない。

また、この注意書きについてはもう一点、面白い点が見いだされる。同じ『アリス物語』、同じ初版であっても、本により注意書きが本文の前に綴じられているものと本文の後ろに綴じられているものとが見られるのだ。製本部分をよく見ると、本文用紙はまとめて綴じられているのに対し、この注意書きのみが本文用紙と一緒に綴じられていない。そして、注意書きそのものにはページが打たれていない。そこから考えると、この注意書きが後から慌てて作られたということが見えてくる。本文用紙を綴じて、いよいよ表紙を取り付けるという段階になって、菊池が注意書きのアイデアを思いついて「本文と一緒に製本するように」との指示を与えて作成した、しかしページを打っていないことから製本会社によって綴じ込む場所が分かれてしまったのであろう。翻訳企画を進める段階でこの注意書きまで考えついていたなら、本により挿入位置が異なるなどということは考えられない。注意書きの案は、本の発行寸前の、最後の最後になって思いついたものであったのだ。

イラストや突貫工事が夢のあと

芥川の死後、菊池が突貫工事的に『アリス物語』を出版したことは、挿絵の扱いにも現れている。よく知られているように、平沢文吉の筆になる『アリス物語』の挿絵は第六章の終わりまでしかなく、それ以降は文字のみである。これまでに示したように、芥川の遺した訳稿が第七章までで、突貫工事的に出版作業が進められたと考えることで、この点も納得がゆく。

芥川が各章の訳稿ができ次第平沢に送っていた、という可能性も考えられなくもないが、雑誌連載でない以上、一般的に考えれば、画家に訳稿を送るのに章単位であるということは考えにくい。そうであれば、芥川の死後、とりあえず遺された原稿を元に出版の判断がなされ、残った部分の翻訳を菊池が行うのと、第七章までの原稿を平沢に預けて、挿絵の作成を同時に行うといった作業が行われたと考えることで、この挿絵の疑問が解決される。想像をたくましくすれば、菊池が自身の翻訳の見本用に直前の第七章だけを手許に置き、第六章までを平沢に送った、そして最後まで菊池が訳し終えた時点で、絵を回収し、印刷にかかった可能性も考えられる。出来上がっていた第七章までを平沢に渡していたと想定すれば、菊池の訳稿が完成した段階で平沢は第七章まで絵を仕上げるが出来ずに、出来上がったものだけを納品し、版組・印刷に回した、とも考えられる。

現在の出版事情から考えて、上記のような事態は想像しにくいかもしれない。いくら何でもそんな雑な仕事が、と、思われるであろう。しかし、突貫工事の痕、十分な校正が間に合わなかったという事実は、挿絵の中に如実に現れている。

第二章の、お菓子を食ったアリスが巨大化する場面（三十～三十一ページ）と、第三章でアリスがドードーから指貫を貰う場面（六十～六十一ページ）であるが、本文と挿絵が全く合っていないのだ。巨大化の場面ではアリスがドードーから何か貰う絵、指貫の場面では、アリスが天井に頭をぶつけている絵がそれぞれあしらわれている。

	pp.30-31	pp.60-61
本文	お菓子を食べたアリスが巨大化	アリスがドードーから指貫を貰う
挿絵	アリスがドードーから何か貰う	アリスが天井に頭をぶつけている

何のことはない、この二つの場面の挿絵が全く入れ違っているのだ。少し落ち着けば絶対に見逃さないような入れ違い。これすら気づかない、あるいは気づいていても直せない、そういう突貫作業の事情が、この二枚の絵から見て取れる。

挿絵に加え、先に触れた後半部分に偏在する大規模な省略も、突貫仕事を裏書きするものである。大急ぎで出すためには、途中の、訳者にとって面倒なだけであまり重要とは思えない部分は端折って訳すしかなかったのだ。

まとめ

今までに見てきたことをまとめてみよう。

楠山正雄の翻訳と『アリス物語』を比較すると、偶然の一致とは思えない訳語の一致が散見される。特に、両者が全く同じ性質の誤訳をしている部分まで存在する。これは、菊池・芥川訳が明らかに楠山訳を底本・下訳として使用したことを物語る。

『アリス物語』において、ストーリー上のキーワードといえる単語の訳や大文字で表された単語の処理の方法を見てゆくと、第七章と第八章を境目として、訳、扱いが異なっている。これは、第七章までの訳者と第八章からの訳者が違っている可能性を示唆している。続いてアリスの言葉遣いを中心に本文を見れば、東京訛ともいえる言葉が第七章まで頻出している一方、第八章以降ではこういう言葉遣いが見えなくなってしまう。特に、この東京訛の中で顕著な単語が、標準語で「あそこ」を意味する「あすこ」である。この言葉は、芥川・菊池それぞれの作品での使用頻度を調査すると、芥川に特徴的な言葉遣いであることが判明した。『アリス物語』本文には、大きく原文を省略した部分があるが、それらはすべて第八章以降に偏在していた。これらの事実より、『アリス物語』は第七章までと第八章からとで別の訳者によって訳されていることが示される。そして、前半部分の訳者が芥川であることも、同様に推定される。

原文の言葉遊びの処理については、上で見たような訳語の断絶と別のパターンが認められる。英語の言葉遊びを日本語で説明するといった処理が第三章までに集中し、その後の章は英語をカナで書く処理と言葉遊びを日本語に移す処理とに偏っている。これは、最初のうち英語の言葉遊びを日本語で解説していたのが、途中、日本語の言葉遊びに移せることが解って、それ以降メモ的に英語を片仮名で書くようになったと考えられる。当初はこの仮名書きの部分も後から見直す予定であった可能性もあるが、急な出版のためと芥川が死亡しているためとで、仮名書きのまま出版されたと想像できる。

菊池による注意書きの内容、その注意書きが製本会社により本文の前に綴じられていたり後ろに綴じられていたり統一性を欠く事実、および『アリス物語』に収録されている挿絵が第六章までであるという事実は、『アリス物語』『ピーターパン』二作の翻訳の完成

を待たずに芥川が自殺した後、その話題性が消えないうちに、作業量が少なく、完成が早いと思われる『アリス物語』を完成させて大急ぎで出版したであろう事情を示唆している。すなわち、芥川の遺した訳稿のみを挿絵の平沢文吉に送り、菊池による本文訳が完成した時点で、以降の章の挿絵の完成を待たずに出版した可能性である。出版が慌ただしいものであり、満足な校正を経ていない点は、第二章と第三章の挿絵が入れ違っている事実からも示されている。また、菊池が翻訳を急いだことは、物語後半部分の大規模な省略からも見て取れる。

小学生全集は、アルスの日本児童文庫との間の盗作騒動に揺れた。この争いの一方の当事者である菊池寛、そして小学生全集の共同編集者として騒ぎに巻き込まれた芥川龍之介、この二人の遺した共同作業のうちの一冊が『アリス物語』であった。『アリス物語』は、その成立の不明瞭さから、『芥川龍之介全集』収載の年譜や多くの作品目録でも芥川の作品として扱われることがほとんどなかった。菊池の年譜や作品目録においても同様である。『アリス物語』について二人の共訳者の執筆範囲を推定し、菊池による注意書きの作成時期、挿絵の扱いを見ることで、この本がどういう状況の下で出来上がったのか、今まで不明であった成立過程の幾分かでも明らかになったものとする。そして、今後『アリス物語』が、改めてこの二人の訳者の作品として論じられるようになることを願う。

謝辞

本件調査のため、楠山正雄訳『不思議の國』(大正九年)をお貸し下さいました高屋一成さんに感謝します。